# 中国北京における都市空間の構成原理と近代の変容過程 に関する研究(1)

陣内 秀信

## 1. はじめに

#### 1.1 研究の目的

本研究は、中国の数多くの歴史的都市の中でも、最も 典型的な構造を持つ北京を対象に、都市空間の構成原理 とその形成過程を読み解くことを目的としている。そし て、歴史的都市における近代化のプロセスとメカニズム を分析するものである。住宅や店舗、居住地と商業地、 市や宗教施設などの都市施設、盛り場、行楽地などを取 り上げ、社会的視野も含めながら都市全体の有機的な構 造を明らかにする。

中国では、ここ数年来の経済の急成長によって、数多くの主要都市に開発の手が加わり、中国固有の都市空間に急激な変化が起こりつつある。こうした状況の中で、700年の歴史を持つ中国の首都北京の都市空間を歴史的視点に立って研究し、意味づけを行うことが急務となっている。ここでの成果は、中国都市のアイデンティティを明らかにするとともに、北京の今後の都市づくりにおける保存、開発の問題を考えるうえで、重要な手がかりになるものと確信する。なお、上海や青島などの租界地では近代都市の形成が19世紀半ばから展開したのに対し、北京のよ

うな歴史的都市では、中国を統一する封建王朝である清

の崩壊(1911年)までを前近代とし、それ以後に色々な

レベルで近代化が推し進められたと考えることができる。

## 1.2 研究の方法

まず最初に、北京の歴史的都市の構造が、現在の北京にどのように受け継がれているかに着目した。本研究の目的にとって、1750年の北京の都市構造を敷地・建物のレベルまで詳細に伝える『乾隆京城全図』が大きな力を発揮する。その全情報を近代の地図(『1927年北京図』)及び、現況図(1/2000、1978年測)の上に重ね、清代の北京全体の状態を復元する作業をまず行い、基本的な都市の構成が変化していないことを明らかにした(図1-1)。次に、現地調査では、こうして得られた地図を用いて、典型的な居住地や商業地、盛り場、行楽地など歴史的に特徴のある地域を観察した。そのうえで、都市構造を理解するのに重要ないくつかのゾーンを選び出し、その中の典型的な建築・施設について、実測及び聞取りの調査を行った。このような作業を通じて、北京の都市構

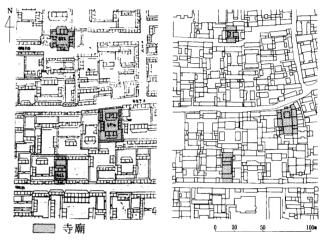


図 1-1 『乾隆京城全図』(1750年:左) と現況図(1978年 測:右)の比較(東四本司胡同付近)

造の特質を包括的に解き明かした。

#### 2. 北京の全体構造

北京全体の特徴を大きくとらえるには、まず歴史をさかのぼらねばならない。北京は、元、明、清代(1279年から1911年)の各時代に繁栄をきわめた首都である(図2-1)。現在の北京に継続される都市骨格の基礎を形成したのは、モンゴル族の王朝である元に政権が移ってからのことである。太祖フビライは、金の中都を放棄し、当時離宮のあった北海の瓊華島を中心に、新たな都として大都を建設した。「都市を方形にかたちづくり、各辺に三つの門を開く。そして、東に宗廟、西に社稷壇を配し、宮城の前面で政治を執り、後ろには市を配置する」といった『周礼・考工記』の王城モデルに基づいて計画されたのである。

1368年に漢族統治の明王朝が興ると、元の大都を基礎として改築と増築を加えた。太廟、社禝壇を皇城内の左右に移し、皇城の後ろに現在の景山を築き、さらに城外の南に天壇、先農壇を造営して、鼓楼と鐘楼を中心軸上に移築することで、封建的国家を象徴する中心軸を強化した。また、1564年には、城外に拡大した市街地を囲い込み、更に、防備を強化するために外城の建設に着手した。当初、内城全体を囲む予定であったが、財力不足のために都市の南側だけにとどまり、現在の北京の特色で

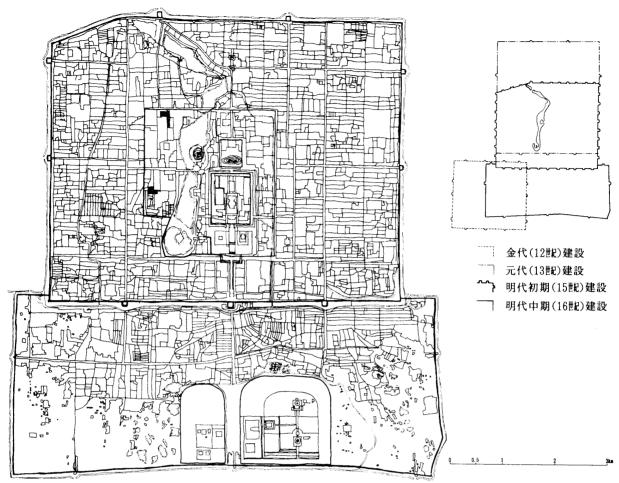


図 2-1 乾隆年間の北京復元図及び12世紀以降の都市変遷図

ある凸型の輪郭が形成された。1644年には、満族の清王 朝に政権が移行するが、都市全体のプランに大きな変化 はなく、現在まで基本的に継承されている。

明清代における北京の都市空間は、内城と外城からなり、内城の中には、中央に皇城、その内部に宮城の城壁があり、全体として三重の城壁が入れ子状に巡る形をとった。その中心である宮殿は、しばしばいわれる「前朝後寝」の原則に基づいて、中心軸上に配置された前方の治朝(行政域)と後方の内寝(皇帝の居住域)から構成され、両側には皇后や皇太子妃の居住域、その背後には庭園が配置されている。これら宮城内の主要な建物群は、西側の皇帝のための園林、そして北海や中海・南海と密接に結び付くように配置されている。

皇帝の祭礼の場である壇廟には、太廟と社禝壇のほかに、外城の天壇と先農壇がある。また、城外の東、西、北には、日壇、月壇、地壇があり、全体で一つの完成された祭祀施設の体系をなしている。こうした壇廟以外にも、北京には多くの宗教施設があり、仏教寺院をはじめとし、道教寺院、イスラム寺院、キリスト教堂などの民間の宗教活動の中心が点在している。

内城の道路ネットワークは、計画的につくられた元の 大都の碁盤目状の骨格を受け継いだものである。一方, 元代以降の自然発生的な道路を取り込んだ外城は,不規則な道路が多く,南北の中心軸を除いて規則的な道路骨格を持たない。住宅地では,支線道路である東西方向の胡同が生活道路として重要となる。胡同の内部は閑静な住環境が保たれており,中庭の樹木の緑と灰色の壁や屋根とのコントラストが住宅地の景観を構成している。一般に,清代の内城は満族の居住エリアであり,漢民族は外城だけに住むことが許された。また,「貴西富東」(西は貴く,東は富む)と称される棲み分けがなされていたようである。

商業活動の中心は、元代の任利海付近から、明清代には前門付近に移り、東西、西西と合わせて三角形からで記述る商業の中心地を形成していた。清代末期には、予治府港で西単が新たに発展した。それに準じて鼓楼付近や珠市でなどの商業地も形成されている。明清代の北京では、内城に娯楽施設を開設することが禁止されていたため、多くは前門付近に集中していた。特に、外城の天橋が始が中心となり、酒楼、料亭、旅館、茶館、劇場、妓館が立地する盛り場が形成され、民間の娯楽地区として機能していた。また、同郷会館は宣武門外に、同業会館は商業、貿易のための北京への入口となる崇文門外に集中していた(図2-2)。

### 3. 居住地の構成と四合院住宅

中国における多様な住宅様式の典型で、かつ重要な位置を占める北京の四合院住宅は、元、明、清代の歴史的な構造を受け継ぐ都市空間の普遍的な基本単位であり、今なお生活空間の舞台となっている。ここでは、実測及び開取りの調査を行った28例の住宅及び現在の地図(1/2000)と『乾隆京城全図』を主な分析の対象とし、伝統的な四合院住宅の配置・空間構成の特質、機能と配置構成との関係、居住地の構成を明らかにした。

## 3.1 居住地の構成

南北方向の主要幹線道路(大街)と東西方向に走る支 線道路(胡同)で格子状に区画される街区は,四合院住 宅が建ち並ぶ典型的な居住地である(図3-1)。この周 囲を道路で囲まれた東西に長い街区は、基本的に東西の 胡同に対して短冊状に割られる。こうすることによって, すべての住宅が北に座して南を向く「座北朝南」という 中国建築の理想をかなえることができるのである。さら に、敷地が分割される場合は、北側が細分化される傾向 が見られ, そこには間口と奥行きの狭い小規模な住宅, また立地条件の良い南側の敷地には大規模な住宅が配置 される。居住地の東西両端は、南北方向の道路に対して 敷地が割られ、そこに店舗が立地している。すなわち、 南面しながら質の高い居住環境の確保を重視する住宅と は異なり、店舗は道路の利用を第一に考え配置されてい るのである。このような計画性の強い居住地に対し、寺 廟などの大規模施設が組み込まれた居住地の内部、施設 の跡地、外城では、路地が入り込み、小規模な住宅が建

車廟 上王要幹線道路 主要単河 城門

図 2 -- 2 清代の都市機能のゾーニング図

ち並ぶ高密な住宅地が形成されている。

#### 3.2 四合院住宅の構成原理

#### 3.2.1 基本構成

北京の四合院住宅において、敷地北側の主屋を<正 房>、その前方の左右の棟を<廂房>、主屋と対面する 棟を<倒座>と呼び、この四棟がほぼ正方形の大きな中 庭に面して配置され基本のユニットを構成する(図3-2)。一般に、正房、東西の廂房、中庭で構成される部分 が、主要な家族の生活空間となる。中心軸上にある最も 重要な正房は、その家の主人夫妻が使用し、廂房は彼ら の子供が使用する。そして、中庭は各棟への通路的な機 能としてだけではなく、植木の観賞の場、子供の遊び場、 冠婚葬祭や宴会の場所など,家族の共有空間としてさま ざまな用途に使われる。これらに倒座を加えることで, 四合院住宅は完結する。住宅の外部と内部の境界となる 倒座には、正門である<大門>が設けられ、その脇の部 屋は門番や使用人の居室、客間、書斎、倉庫などサービ ス空間として使われる。また、倒座の西側に厠を設ける ことが多い。

#### 3.2.2 中心軸上における空間構成の類型

四合院住宅の特徴は、一本の中心軸上に用途の異なる中庭と、それを囲む建築群がいくつも連なり、奥へ延びていくことである。その奥行きは「進」という数詞で表

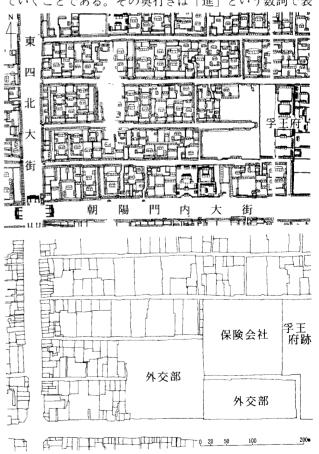


図3-1 乾隆年間(上)と現在(下)の居住地の比較 (東四1条から4条)

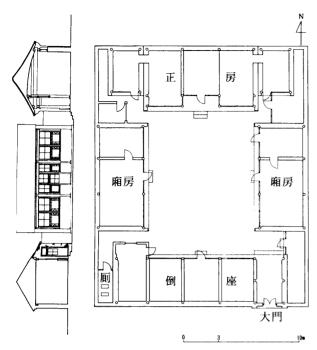
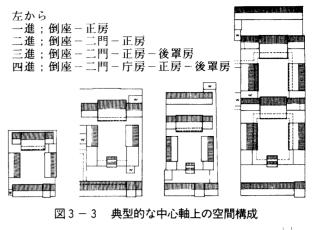


図3-2 基本ユニットで構成された四合院住宅 (所在地:六号頭条3号)

される。北京の主な居住地では、東西に走る胡同間の相 万の距離が70m 前後であるため、敷地の奥行きに対応し て中心軸上の空間構成に共通性が見られる。その典型は, 図3-3に表すことができ、次のように機能が分化する。 一つの中庭から構成される一進の住宅では、基本的に正 房を主屋, 廂房をそれに次ぐ棟として使うが、倒座を居 室や寝室などに使用する例も見られる。二進の住宅では, さらに中心軸上に二門と呼ばれる門を設けて, 中庭を前 後に分割し、公私の領域を明確に区別している。一般の 客人や物売りとの応対など対外的な活動は, すべて倒座 側で行われる。三進の住宅では、正房の裏に、細長い庭 とそれに付随する長屋状の<后罩房>という棟を配し、 燃料の貯蔵庫や物置,女性の使用人の領域としている。 高級官僚や大富豪などが住む四進の住宅では, 主人の領 域がさらに分化し、正房の前に<庁房>が配置される。 ここでは、接客、宴会、儀礼など公式の活動が行われ、 まさに住宅の中心的位置を占めている。一方, この後方 は家族だけが使用する私的な領域となる。

四進の住宅のように、前方に格式の高い儀礼性を帯びた庁房、後方に居室や寝室に使われる正房を配置する形式は、「前堂(朝)後室(寝)」と呼ばれ、宮殿や王府、宗教施設、住宅など多種多様な建築に応用されている。奥行きが、一般の住宅と比べて三倍余りもある学王府と比較すると、個々の建物と中庭の規模を拡大するだけで、四進の住宅の空間構成とほぼ同じであることがわかる(図3-4)。さらに、調査・分析を行った住宅や『乾隆京城全図』の中にも、このタイプが数多く見られることから、こうした配置からなる空間構成を北京の四合院住宅の基本型としてとらえることができる。そして、この



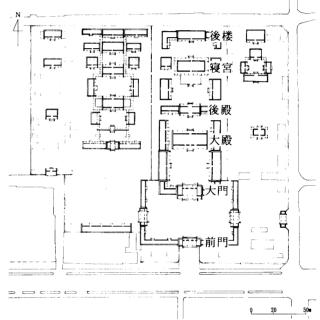


図3-4 孚王府平面図

基本型をもとに、敷地の規模や住宅の要求に対応して機能を複合化あるいは混在させることで、さまざまなバリエーションが形成されているのである(図3-5)。

#### 3.2.3 入口の方位と空間構成の結び付き

四合院住宅では、風水思想の吉凶が入口の方位と位置 に大きな影響を与える。最も吉とされる入口の方位は南 東と北西で、実際に南入りの住宅では大門が敷地南東隅

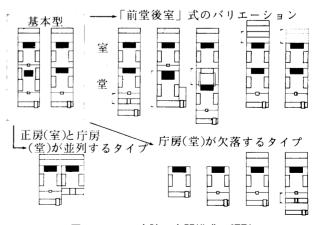


図3-5 四合院の空間構成の類型

に置かれ、北入りの住宅では北西隅に置かれている。しかし、東入りや西入りの住宅では、一定した原則はあまり見られない。また、中庭を中心とした空間構成において、入口に対する正房の向きには、二つのタイプが見られる。一つは、方位に関係なく正房が入口に対して正面を向くもの、もう一つは、入口の位置に関係なく正房を南面させるものである。前者では、住宅正面に向かって右側に大門を置くという共通する原則が見られ、後者では大門の位置は一定しておらず、できるだけ倒座側からアプローチさせるよう大門や通路を設けるという特徴が見られる(図3-6)。

## 3.3 四合院住宅の事例

## (1) 西四3条11号(図3-7)

内城の北西に位置し、店舗が並ぶ西四北大街の西側で、東西方向の胡同が幾重にも連なる西四1条から8条は、大官僚や富豪が多く住んでいた典型的な居住地である。胡同の両側には灰色の壁が連なり、その間に大門が点在する北京ならではの伝統的なまち並みが続いている。その中でもこの住宅は、前後両側が胡同に面し、南北の中心軸上に五つの中庭を間に挟みながら奥へと延び、さらにその横に華麗な庭園を有する大規模な四合院住宅である。

敷地南東の大門を入り左へ折れると使用人の居室及び 客間である倒座があり、これと対峙する華麗な垂花門を 入ると儀礼の場である庁房、居住部分の正房、さらにこ の裏の女性の居室、そして使用人の居室や物置として利 用される后罩房へと続く。このように機能的に分化する 一方で、欄干やまぐさ飾りで装飾された回廊によって、 垂花門から庁房、正房、女性の居室までが中庭を挟みな がら有機的に結ばれ、快適な住環境を実現している。

中心軸上の空間が、格式ある四合院の平面形式に固執するのに対し、この脇に設けられた庭園は、自由な空間 構成をとり、住宅の中で最も壮麗につくられている。娘

#### I. 正房が入口に対して 正面を向くタイプ



図3-6 入口と正房の向きの類型

の居室として使われた < 绣楼 > , 太湖石の築山に組み込まれた < 楼房 > や < 亭 > などが中庭に面して配置され、四周に回廊を巡らし、各棟と中庭が一体となって庭園全体を構成していた。

### (2) 東四2条21号(図3-8)

伝統的な商業地である東四の裏側,格子状に区画された居住地にこの住宅は立地している。南入りで「前堂後室」式の大規模な住宅ではあるが、敷地後部が分割され、北入り一進の小規模な住宅(後述の住宅)と背中合わせに建てられている。

この住宅は、1911年に、熱河省主席の李丕基が購入し、 二世代からなる7人の家族と使用人が住んでいた。利用

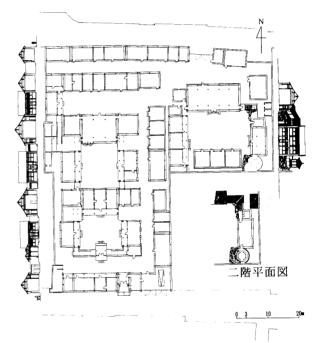


図3-7 大規模四合院(西四北3条11号)

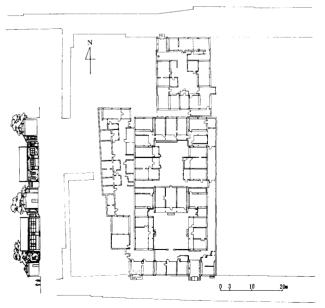


図3-8 南入りと北入りの四合院(南側:東四2条21号, 北側:東四3条14号)

形態は、倒座側を使用人や接客空間、垂花門より奥に主人や家族の生活空間をとる典型的なものではあるが、敷地の奥行きが短く、后罩房を配置することができないため、敷地の西側に長屋状の付属棟を設け、ここを厨房や使用人の居室などのサービス空間として使用していた。

1964年以降、血縁関係者以外の家族によって徐々に分割利用されていく。まず、もともと家族の生活空間となっていた最後尾が分割され、前と後が関係のない家族によって別々に使われた。その後、文化大革命の際に、住宅の半分以上が国の所有となったため、さらに多くの家族によって各棟が柱間ごとに分割され、現在は25世帯からなる40人の人々が、中庭を共有しながら生活している。また、住宅の一部はオフィスや店舗としても利用されている。

#### (3) 東四3条14号(図3-8)

東西に走る胡同の南側に位置する北入りの典型的な住宅である。風水思想にとって吉とされる北西の方角に大門を設け、正房は入口に対して正面を向くといった四合院の空間構成の理念に基づいて建てられている。したがって、正房は敷地の南側に位置し、しかも北向きであるため日照や通風条件に有利な条件とはならない。そのため、正房の裏側に小さな空き地を残し、壁に開口を設け、正房の奥行きと軒高を通常よりも小さくとって、中庭に十分な日照を確保している。すなわち、四合院の格式や原理を重視しながらも、快適な室内空間と中庭空間を確保するために、限られた空間を合理的に構成してつくられているのである。

## 4. 商業地の構成と店舗

ここでは、店舗建築を対象に、空間構成や使い方、敷地割、さらには北京の商業地の構成手法を現地調査で得た21件の実測例(うち詳細なもの6件)及び聞取り調査の成果に基づいて、現況図と『乾隆京城全図』、文献史料を補足的に利用しながら考察を行った。

## 4.1 商業地の構成

店舗併用住宅は、道路側から奥へ、店舗に利用される連続棟の前房、中庭、後房の順に配置される基本構成を持つ。住宅と同じ短冊形の敷地割を持つこうした店舗が、道路を軸として集合する形式こそ、北京の一般的な商業地の構成であることが、現地調査と各時代の都市図の考察からもわかる。北京の商業地は、一般に城門と城門を結ぶ東西・南北の幹線道路沿いに形成されるが、東西軸には方位を重視する住宅が優先的に配置されるために、明らかに南北軸のほうが繁華なものとなっている。しかし、北京で最も古くからの商業地として栄えた仕刹海付近では、幹線道路沿いに発達する商業地とは違ったまちの構成を持っている。このあたりでは、地形に沿って弧

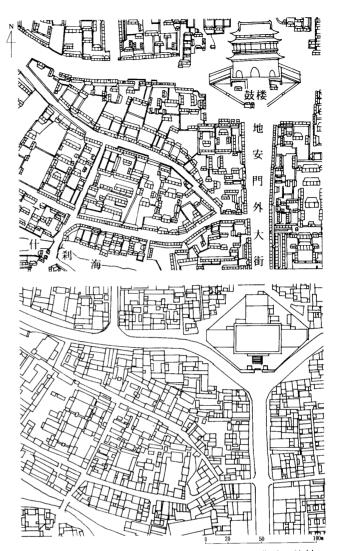


図 4-1 乾隆年間(上)と現在(下)の商業地の比較 (什刹海付近)

を描く数本の道路の両側に、きわめて間口の狭い店舗併用住宅が密集し、商業地が面的に広がっていることが特徴である( $\mathbf{図4-1}$ )。

#### 4.2 店舗の空間構成と機能

## 4.2.1 店舗の空間構成

北京における店舗は、商業行為をする場であると同時に、主人または従業員が起居する場合が多く、一般に店舗併用住宅である。店舗の基本的な空間構成と機能は、多くは連続棟である前房の1棟目を接客空間とし、2棟目をサービス空間としている。さらに、中庭を挟んだ奥に後房を持ち、そこを主人や従業員の生活の場とする空間構成をとっている。これは、敷地の大小や商人の財力に応じてさまざまに変化する。

店舗併用住宅は、店舗空間を拡大するために連続棟を 用いる一方、居住空間を拡大するために多層化を図り、 さらには室内空間を確保するために中庭を吹抜けに変化 させるという順序で、空間構成のバリエーションを示す。 また、四合院住宅が機能分化のために複数の中庭を配し て、奥へ展開するのに対し、店舗併用住宅では多層化や中庭の室内化で機能分化を図っている。こうして、店舗併用住宅は、機能性を重視した空間構成と土地の有効利用、中庭空間の室内化による狭い敷地の高度利用を実現しているのである(図 4 - 2)。

#### 4.2.2 断面構成の特徴

北京の店舗併用住宅の空間構成で最も特徴的なのは、店舗空間にあたる前房の連続棟である。店舗に連続棟が多用された理由として、店舗面積の拡大に対する要求が考えられる。北京に特徴的に見られる<勾連搭>と呼ばれる棟が連続する形式には、2種類ある。切妻屋根のみで構成されるものと、街路側に片流れ屋根を用いたものである。類似した架構方法には、住宅に用いられる垂花門のような格式表現の装置がある。切妻屋根で構成された店舗には、こうした装置の形態を採り入れたと考えることもできる。片流れの連続棟は、店舗前面の拡張のために仮設的に付いていたものが、常設化したのではないだろうか。また、近代化の過程で、西欧風ファサードへの意識の高まりから、飾り壁を付けて店舗の立面をフラットに表現する形式が現れ、それを可能にする片流れ屋根がさらに普及する要因となった。

#### 4.2.3 外観の変容過程

### 4.3 店舗の事例

#### (1) 廊房 2条92号(図4-3)

この店舗併用住宅は、非常にコンパクトな敷地の中、連続棟の前房、中庭、後房によって構成され、基本的な店舗併用住宅の空間構成をとっている。その外観は、屋根、軒先を見せ、部材を赤や緑で塗り分けた伝統的なデザインとなっている。この店舗併用住宅で特徴的なのは、

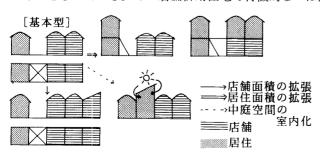


図4-2 店舗の空間構成の展開

前房2棟目にある天袋状の空間である。人が横になって やっと入れる程度の穴が口を開けており、はしごを使用 して昇降する。現在は、物置として利用しているが、塗 料店だった当時は、従業員の寝室であったという。以上 のことを参考に当時の空間利用を考察すると、前房を店 とし、後房を商品倉庫として、従業員は天袋で起居して いたことがわかる。



写真4-1 屋根線を隠す装飾板

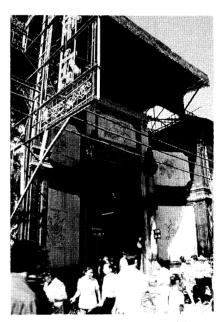


写真4-2 ファサードの西欧化

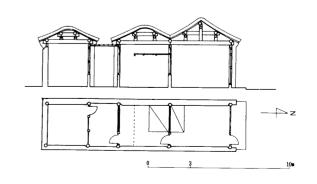


図 4-3 小規模店舗 (廊房 2条92号)

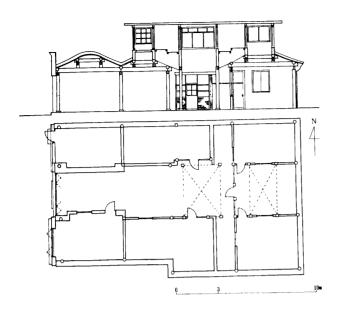


図4-4 中庭空間を室内化した店舗(門框胡同18号)

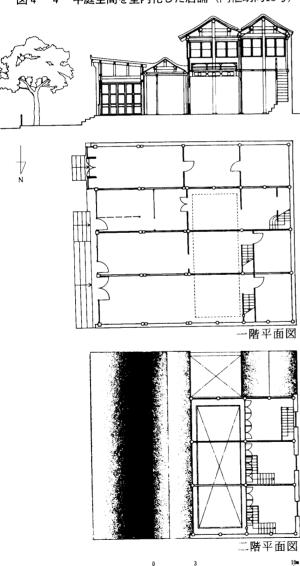


図 4 - 5 居住面積の拡張と中庭の室内化 (地安門外大街101号)

## (2) 門框胡同18号 (図4-4)

この店舗併用住宅は、南北に通る門框胡同の東側に位置している。 2 棟連続の前房と、中庭を挟んで居住空間、倉庫に使われた後房で全体が構成され、店舗併用住宅の基本的な空間構成をとっている。しかし、西欧的なファサードを持ち、内部空間に吹抜けを取り込む手法を見せていることに特徴がある。ただし、この吹抜けの部分は、屋根を支持する柱が建物本体の構造と別で、後に増築されたことがわかる。聞取りによると、この店舗はかつて毛皮店で、吹抜けは湿気を取り除くために設けられたものと考えられる。

## (3) 地安門外大街101号 (図 4 - 5)

地安門外大街の西側に店を開くこの店舗併用住宅は, 間口方向に柱間が4間あり,平屋で連続棟の前房と,そ の後ろに二階建ての連続棟が続く構成をとる。最も南側 の1間は奥も平屋で,間に中庭が設けられている。北側 の3間は,後房の二階部分に3間連続の非常に繊細な装 飾を持つ回廊が巡る吹抜けになっている。二階へは,後 房の最も奥に付けられた階段でアプローチする。この空 間構成は,連続棟である前房,中庭,後房からなる店舗 併用住宅の基本的な構成から発展し,中庭を室内化し, 多層化を図った例である。吹抜けの部分は,増築された ものではなく,建物本体と一体となって最初から計画されたもので,一つの完成した中庭の室内化が見られる。

#### 5. 北京の都市施設

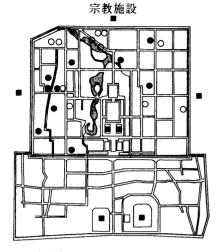
行政的中心の内城と、経済・文化の中心となる外城に分けて、それぞれの都市施設の成立、立地、及びその変容を明らかにした。特に、内城では歴史的視点に立って、大規模施設の配置や空間構成、跡地利用とその変容、また各種施設が都市内部に分散しながら配置される意味に注目した。一方、外城では社会的視野を含めながら、各施設の立地と機能の結び付きを考察し、内城とは異なるその都市空間の特質を明らかにした。

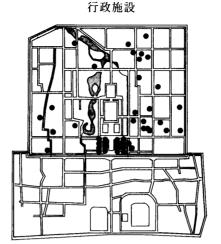
### 5.1 内城の都市施設

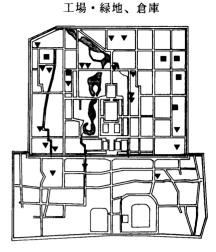
## 5.1.1 各時代の施設の配置とその特色

元、明、清の各時代の都市施設を見ると、明代は元代の都市施設の用地を活用しながらも独自の都市づくりを行ったが、清代は明代のものを若干改造したにとどまる。元代は、金代以前の寺廟を取り込み、幾何学的なプランニングを組み合わせるという柔軟な対応が見られるが、行政施設については風水上の配置が優先され、後に利用上の便により一部位置が移されるという経過を経ていると考えられる。

明代には、祭祀施設の構成が前時代とは大きく異なり、 日壇、月壇、天壇、先農壇、地壇を東西南北に配置し、 また、社稷壇と太廟を皇城の南部に東西に配置するなど、







■ 祭祀施設 ● **皇家寺廟 〇 一般寺廟** 

図5-1 明代の施設別分布図

▼工場・緑地 ■ 倉庫

皇帝の中心性に基づいた計画が行われている。更に、これまで比較的分散していた行政施設を皇城の南部に集中させ、会同会館や諸王府、十王府などを皇城東部に置き、異なる民族間の通訳と翻訳を担当する四澤館を皇城との間に置くなど、人の流れを熟慮した計画が行われている。一方、倉庫、工場や生産基地などは、運河を中心とした流通の便や生産に不可欠である用水の確保がその立地の優先条件となり、適地が選択されて、全体の都市骨格の中に組み込まれている(図5-1)。

清代の皇帝の寺廟や行政施設などは、明代のものを基礎とし、新たな制度である八旗制度に準じるように変革を進めている。その中でも、王府の制度が変わり、内城には多くの王府が建設される。明代以前の中央所有の用地の転用や一般官僚の住宅の利用が見られ、いずれも交通の便が良く、周辺環境が良好で、造園のために水を確保しやすい場所に設けられている。

こうして見ると、皇帝の権力に基づく理想的な都市計画は、祭祀施設や行政施設の一部などの限られた施設にのみ厳密に適用され、運河など自然や地形に左右されるものと結び付いた施設は、機能を重視したものとなっている。各時代を通じて、理想的な都市計画と機能的な都市運営とのせめぎあいを都市施設の配置に見ることができる。

#### 5.1.2 大規模施設の空間構成と跡地利用の計画

行政施設、王府、宗教施設を比較すると、機能、用途の違いにもかかわらず、その建築群の配置構成はほぼ共通している。大門があり、その北に中庭を中心として東、西、北に建物が並ぶユニットがあり、これが二つ連続する。そして、二つのユニットの間に門が設けられたり、その後方には南面した建物が並んだり、東西両側に庭園や付属の家屋が配置されるなど、さまざまなバリエーションを示すが、核となる中心部の構成は変わらないことが多い(図5-2)。

それに対し、独自の形態を持つものが、倉庫や生産基

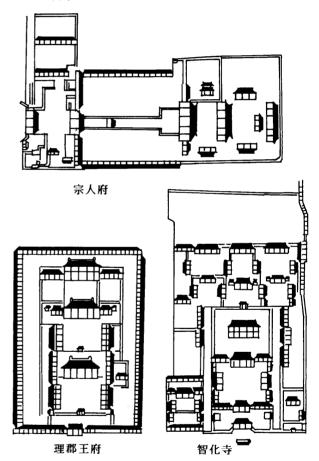


図5-2 都市施設の建物配置(『乾隆京城全図』より)

地である。広い敷地内にいくつかの建物が配置されているものが多く,その配置から規則性はあまり感じられない。倉庫は水運と結び付いてつくられ,運河に沿って配列されている。時代が変わり,放棄された倉庫跡は住宅地に転じた。こうした場所では,もともと存在していた運搬用の道路や運河を拠り所として住宅が建てられたため,路地が入り組む複雑な構成を生んだ。こうした袋小路や不規則な胡同の入り込んだエリアが,北京の内城にいくつか見られ,大規模施設の跡地であることが多い。

大規模な都市施設や道路骨格から感じられる権威的な都市空間の中に、こうした庶民の生活空間がつくられているのが興味深い。

このような都市施設の建物や用地は、元、明、清そして現代と、新たな時代に必要とされた施設に転換され利用されてきた。多くの王府は、建物自体は建て替わっているものもあるが、文教施設やオフィスとして今でも活用され、その他の施設も都市の近代化を推し進めるのに必要な公共施設あるいは大規模用地の供給源となった。

## 5.2 外城の都市施設

経済的、文化的に北京を支えた外城では、こうした都市機能の枠をすでに超えて、きわめて成熟した都市文化が開花した。追い込まれた漢族が、むしろ外城を自分たちの首都と考え、自らの世界を築き上げたと説明するほうが自然なほど単独の都市としてとらえることができ、彼らが蓄積した膨大なまちづくりの経験を生かして、自由で変化に富んだ都市空間を形成したのである。

ここでは、外域の形成過程と空間構造を解き明かしながら、外域に特徴的な都市施設である会館、寺廟、劇場、妓館、料亭について、現地調査の成果に基づき、これらの空間構成の特質および各施設の立地と地域構造の結び付きを明らかにした。実際には、同郷会館4件、同業会館1件、まちの構造や地形と強く結び付いた寺廟が2件、劇場2件、妓館3件、料亭2件が、実測、聞取り、考察の主な対象となった。

## 5.2.1 会館

会館は、四合院住宅と同様、一本の明快な中心軸に沿って、複数の中庭を間に挟みながら、奥へ延びる構成をとる。しかし、自治、集会の場としての役割を持つ会館では、一般の住宅よりも中庭が大きくとられ、さらに郷里あるいは商人たちの守護神がその内部にまつられて、それと対面するように戯台(舞台)が設けられている。

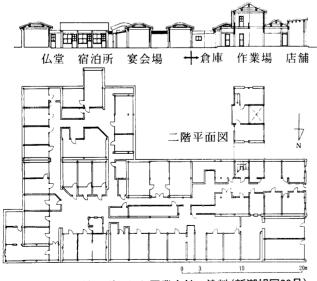


図5-3 中心軸をずらした同業会館-染料(新潮胡同20号)

戯台の前面には、観劇のためのホールが計画されているが、高温・多湿の江南地方に多く見られる野外のものとは異なり、北京では戯台とホールが大屋根で覆われることが多く、劇場空間としての一体感がより強くなっている。このように、会館は自治、信仰、宿泊、コミュニケーションのための空間として機能しただけでなく、首都北京における同郷、同業の人々にとっての遊興空間としても使われたのである。また、道路沿いに店を開く同業会館では、店舗より後ろの中心軸をずらして、会館本来の機能を持つ空間と店舗の空間を明確に区別する空間構成の手法が見られた(図5-3)。

#### 5.2.2 寺廟

外城の宗教施設は、その多くがまちや周辺環境と深く結び付きながら配置され、明快なアプローチを持つ象徴的な空間構成をとっている。複雑に道路が入り組んだ外城にもかかわらず、道路から直線的に参道を引き込んだり、通りの入口や角、辻など、道路から見たときのアイストップの位置に置かれている。計画性の強い道路がほとんど存在しない外城だが、そうした中にあっても、個々の場所で空間の象徴性を追及しながら、コミュニティの重要な核となる宗教施設を作り上げていたことがわかる(図5-4、図5-5)。また、地形に多少の起伏を持つ

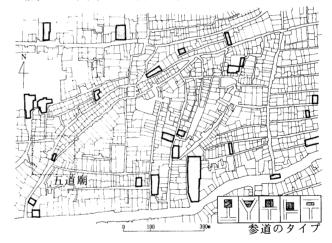


図5-4 まちの構造と寺廟の立地(大栅欄西部)

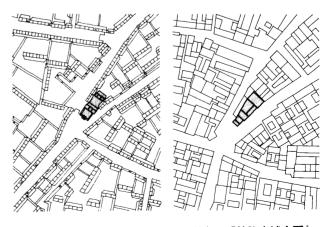


図 5 - 5 ちまたに立地する五道廟:『乾隆京城全図』 (左) と現況図(右)

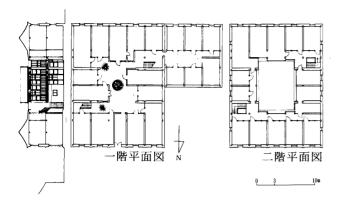


図5-6 快適な中庭空間を持つ妓館(百順胡同18号)

外城では、近くの景勝地と結び付きながら、微地形を読み込んで寺廟を配置する手法が見られる。地形の低い先農壇の西側では、春と夏に水が溜まって水郷の風景をつくりだし、こうした恵まれた自然環境を利用して、寺町が形成された。眺望に有利な立地条件の良い台地のエッジに沿って寺廟が集中し、それぞれ参道を延ばして、象徴的な空間構成をとっていることも明らかになった。

#### 5.2.3 妓館と料亭

妓館と料亭には、洋風のアーチ形の窓が連続する共通したファサードのデザインを持っているものが多い。しかし、いずれの施設も、門を入ると、外観とは打って変わって中国本来の中庭空間が存在し、隅に木が植えられ、回廊が巡る二階建ての建物で囲まれている。中庭の規模は、訪れた者に心地好い印象を与えるバランスがとれたもので、経験の蓄積に支えられた快適な空間が実現している。また、間口や奥行きの狭い敷地では、四合院などの中国の伝統的な平面形式にこだわらず、条件に合わせて自由な平面構成をとり、限られた空間を合理的に利用する工夫が見られる。

このように、洋風のファサードがまち並みにアクセントを与え、ランドマークとなる一方、内部には中庭、欄干、回廊、格子窓、樹木、池など中国人に身近な空間構成をとろうとしていたことがわかる。妓館と料亭のいずれも、気分の良い環境の中に多くの部屋を配置する必要がある。そこで選ばれたのが、やはり中国本来の中庭形式であった。これらの遊興施設がどれも同じように、中庭を囲んで、小部屋を二層にわたって周囲四面に並べる構成をとっていることが注目される(図5-6)。

#### 6. まとめ

本研究によって、個々の住宅から都市全体に至るまで、 北京の歴史的な都市空間の構成原理が明らかになった。 特に、清華大学との友好的な共同研究が実現したことに より、多種にわたる建物の調査が可能となったこと、ま た現在の地図(1/2000)を入手できたことから、予想以 上の成果をあげることができた。今後は、これまでの前 近代の北京の都市空間に関する成果を基礎として、近代 の都市の変容過程とその結果出来上がった都市空間の特質について解明することができるものと確信している。

#### <研究組織>

主査 陣内 秀信 法政大学工学部 教授 委員 朱 自煊 北京清華大学建築学院 教授 高村 雅彦 日本学術振興会 特別研究員 (法政大学) 木津 雅代 KIDS 生活空間工房 プラン +\_ " 牧 北京清華大学建築学院 助手 袁 鐘 舸 北京清華大学建築学院 助手 笠井 健 法政大学大学院 修士課程 田村 広子 法政大学大学院 修士課程 稲葉 佳子 ジオ・プランニング プラン +--村松 伸 東京大学生産技術研究所 助 井上 直美 東京大学生産技術研究所 博 士課程 調查協力 恩田 重直 法政大学大学院 修士課程 王 11 亜釣 北京清華大学建築学院 修士 課程 黄 偉文 北京清華大学建築学院 修士 課程 몸 絮飛 北京清華大学建築学院 修士 課程

#### 図面作成協力

岡本禎子・渡辺真人・郡 知子・長濱武明・ 菅澤彰子・高 柳(各員とも法政大学大学院)

## 关于中国北京的城市空间的构成原理和 近代的变迁过程的研究

## 1、前言

#### 1、1研究的目的

北京是中国许多历史名城中,最具城市构造典型特色的。本研究之目的就在于查明它的城市空间的形成过程,并在分析历史城市的构成原理的同时,对近代化过程和其机理也进行分析。从住宅、店铺、居住地和商业地、市场及宗教设施等等的城市设施、游乐地及游览地方包括社会的观点、这几方面来究明城市整体的构造。

## 1、2研究的方法

首先,着眼现代北京继承了多少历史古城的城市构造。因此将《乾隆京城全图》(把1750年的北京城的构造详细地记述到建筑基地、各个空间构成)的一切内容覆盖到近代的地图(1927年北京图)上,再现了清代乾隆年间的北京城的全景(图1-1)。然后在实地调查中用这张工作图和现在的地图(1/2000)彻底观察典型的居住地、商业地、游乐地等具有历史特征的地区。从中选出几个对理解城市构造具有重要意义的区域,就其中典型的建筑、设施等进行实测调查和现场采访。通过这样考查对北京的空间构造的特色进行全面的分析。

## 2. 北京的城市变迁

北京是元、明、清各代及其繁荣的首都(图 2 - 1)。当今北京所继承的城市构造之基础形成于1264年政权转手蒙古族王朝 - 元朝后,根据《周礼·考工记》的王城模式"方九里,旁三门,国中九经九纬,经涂九轨,左祖右社,面朝后市"规划而成。1 3 6 8 年汉族明王朝兴起,以元大都为基础,实施改扩建。太庙,社稷坛向皇城内左右移动,又皇城后筑今日的景山,再城外南面营造天坛、先农坛,并把鼓楼、钟楼向城市的中轴上移筑,强化了封建制国家象征的中心轴。1 5 6 4 年又将扩大到城外的商业地圈人,又为了强化防备着手建设外城,当初预定圈人整个内城,而终因财力不足只局限于南侧部分,形成了具有凸形的北京特色。1 6 4 4 年满族清王朝执政后,城市整体无大的变化、并基本继承至今(图 2 - 2)。

#### 3、居住区的构成和四合院住宅

## 3、1居住区的构成

南北向主要干道(大街)同东西向延伸的支道(胡同)构成格子状,此街坊为并列排列的四合院典型居住区(图3-1)。这东西向的街坊内,建筑基地按东西向均被分成短尺状。这是应了四合院坐北朝南的理想,而且分建

筑基地时北侧总是被细分,那儿分布面宽和进深狭短的小型住宅,然而居住条件优越的南侧总是分布大规模住宅。 与严谨规划的居住区相对应的是,在一块街坊内部还设有 寺庙等大规模设施及这些设施的遗地,再有在外城,胡同 交错,形成了高密度的居住地。

#### 3、2四合院住宅的构成原理

北京四合院,位置在住宅整体的北侧的房屋为正房,前方左右的房屋为厢房,正房对面的房屋称倒座,这四栋房屋面向正中一个基本正方形的院子,它们各自为一个四合院的构成要素(图 3 - 2)。其中正房、厢房、院子是主要家族的生活空间,中间的院子既发挥着通往各房屋的通道之功能,还给人们提供舒适,自由的露天空间,成为纳凉、团聚,又将成为婚丧喜之场所。加之倒座完成四合院。作为住宅内外之境界的倒座,设有大门,其两侧是门卫和佣人的卧室、会客室、书斋和仓库等服务用空间。

四合院住宅的特征是在一根中心轴上蝉连并延伸着用 途不同的院子和周绕着院子的建筑群。但北京的主要居住 区, 其东西向胡同相互间隔约70米, 根据各地建筑基地 的进深,中心轴上的配置有其共性。其典型以图 3 - 3 表 示。可分为以下功能,一进(拥有一个院子)的住宅,基 本上以正房为主房, 厢房为次之用途, 有不少倒座亦作起 居室、卧室。二进的住宅,在中心轴上开设称作二门的门 ,院子空间前后分划为公私两个领域。三进的住宅在正房 的后面设有窄长的院子和付随的房屋叫做后罩房。后罩房 作燃料等物资储藏和女佣人之用。高级官僚、大富豪住的 四进的四合院、主人的领域进一步细化、正房前设厅房以 接待客人、宴会、礼仪之用、占据正中。其后方为家族专 用的生活空间。这种前方为礼仪性的厅房, 后方为起居室 、卧室的正房布置形式叫做"前堂后室",此形式广泛应 用于宫殿、王府、宗教设施、住宅等各式各样的建筑中( 图 3 - 4),而且以此为基本型,与建筑基地的规模、住 宅要求相对应增加或混同一些功能,形成种种变形(图3 - 5)

#### 4、商业地的组成和店铺

#### 4、1商业地的组成

店铺兼住宅基本上平行分布在道路的两旁。作为店铺的勾连搭按前房、院子、后房的基本构成顺序分布。和住宅一样拥有相同的短尺状建筑基地的这种店铺,以道路为轴心的集合形式就是构成北京一般商业地的一种组成,这

注 外国における研究の成果が、当該国にその国の言語によって還元されることこそ 国際協同研究の意義と考え、中国語の要約を添付した。(主査 陣内秀信)

种情况在实地调查和考察各时代的城市图时亦可明确考察到。北京的商业地一般都沿着连着城门和城门的东西、南北干道形成。东西干道由于环境、方位都有利于住宅建设,所以被住宅优先占据着,这样南北轴方向就形成了繁华街。然而具有典型传统的商业地什刹海附近,其构成却与沿干线道路的商业地不同,这一带是沿着地形的变化,在几条弧形的道路两旁,密集着许多面宽狭小的店铺,而且还有分布面很广的特色(图 4 - 1)。

## 4、2商店的空间构成和功能

北京的店铺大都在经商的同时,一般还是店员、住家起居的场所。店铺的基本构成的功能大都以勾连搭的前房的第一栋为接待客人的空间,第二栋为服务空间,进而院子后的后房作为生活空间。这种店铺空间随着建筑基地的大小、商人财力不同而有各式各样的变化。有些拥有大规模店铺的富豪在别处另有四合院作为住宅,而以些零售小商则起居在店铺内。

店铺兼住宅的空间构成试图实现多层化和院子的室内 化以便功能分化,为了有效地利用空间和土地,将院子室 内化,以实现狭小的建筑基地的高密度利用(图 4 - 2)

- 5、北京的城市设施
- 5、1内城的城市设施

## 5、1、1各时代的设施的布置及其特色

从元、明、清各时代的城市设施看,明代灵活运用着元代的城市设施的建筑用地。同时开始了明代独自的城市建设,清代又对明代的城市设施的建筑及其用地作为若干改造(图 5 - 1)。仅仅祭祀设施及行政设施的一部分符合在明代确立的突出皇帝至高无上的理想的城市规划,那些与运河等自然及地形关系密切的设施则按功能分布。从中可以看出在各个时代,理想的城市规划同功能性的城市规划共同支配着城市设施的分布。

## 5、1、2大规模设施的空间构成和遗地利用计划

城市设施的建筑及用地随着元、明、清、现代的时代变化,各时代都根据当代的要求转用着它们。许多王府其建筑本身虽已改建。但有些文化设施及办公场所至今还在使用。到了近代有些城市设施已被改成公用设施或作为其他设施的用地(图 5 - 2),而且那些各朝代放弃的用地

又被许多住宅填补,形成许多死胡同,为庶民百姓提供了 良好的生活空间。

#### 5、2外城的城市设施

#### 5、2、1会馆

会馆和四合院住宅一样,沿着在一根明了的中心轴上,挟着两、三个院子伸向深处。而且会馆不仅为自治、信仰、住宿、交流的功能留有空间,其内部还设有戏台,为首都北京的同乡、同行的游乐空间发挥着作用(图 5 - 3)。5、2、2 寺庙

外城的宗教设施大都从干道把一参拜道直线的深入设置在道路一角、十字路口。即与城市构造紧密结合,整体又表现出极其象征性的空间(图 5 - 4、图 5 - 5)。而且在地形上多少呈现一些起伏的外城,正好适合先了解微地形,然后让寺庙布置的建筑规划。即寺庙都集中沿着可以远眺的台地边缘,再配上一条长长的参拜道,可以明确地看出表示象征性的宗教空间。

## 5、2、3妓院和高级饭馆

妓院和高级饭馆大多采用在建筑立面上一排洋式的拱形窗户的建筑手法,这种建筑立面给街道以特殊的印象和地方标志。然而内部的院子、栏干、格子窗、树木、池又是中国人十分熟悉的空间构成。而且妓院和高级饭馆都必须拥有许多房间,各自的房间确保有面向院子的高雅的室内环境,同时必须实现舒服的院子空间,这一特性在妓院和高级饭馆的共性的空间构成中表现出来(图 5 - 6)。

#### 总结

本研究,由于运用了从北京的城市构造到每一个住宅的研究方法,以至于城市的的形成过程及各自的空间构成的特性明了化。特别是与清华大学的共同研究使多项建筑调查得以实现,而且得到这份地图(1/2000),取得超过预期的成果。今后我们还将以前近代的北京城市构成的研究成果为基础,一定能解明近代城市的形成过程及其空间构造的特性。